

307

特249

631

法學博士大川周明述

日本精神への淨化



始



昭和七年四月五日
金澤市帝國座に於ける講演
の概要速記をそのまゝ綴り
たるものにして、文責は發
行者にある事豫め讀者諸賢
に斷り置く。

國難に直面して

國民の蹶起を促す。

法學博士 大川周明講演



我が日本といふ國は、その國柄からいふと、世界に比類のない立派な國家である。しかし、國家といふものは、國民あつての國であるが故に、斯の如き立派な國家を造り上げてゐる日本國民も亦、必然世界に勝れたる、國民でなければならぬ。此事は我々が心細やかにして、日本の歴史を讀めば、ハッキリと解るのである。國の成立から考へてみても、我々の先祖は、『我が國の大君であるところの天皇陛下は、やがては世界、を統一し給ふ使命を帯びてをられる』といふ事を、固く信じてをつたのである。この信仰は、日本の古書を讀んでみると、天皇を呼び奉るに「天が下知ろす現神（アキツカ

「知ろす」といふ
大和言葉は漢字では、「ギョ」と書いてをる。「ギョ」といふのは、統
御の御であり、「天が下」といふのは宇宙である。宇宙を統御すると
いふ事を、我々の大和言葉では「天が下知ろす」といふのである。
天が下知ろす、非常な役目を、我が大君が天から授かつて、をられ
るのである。「いふ信仰であつたのである。」

その信仰の元の我々の先祖は、亦自らを呼ぶに、「アメ」の「マス
ヒト」と、いふてをる。自分を呼ぶに「アメ」を以てしてゐる。「ア
メ」の「マスヒト」といふのは、天の益人と書くのであつて、我日
本は、天上の理想を、この地上に敷く役目をもつてゐるのである。
古書にもある如く、日本の事を「天上の理想と共に榮えてゆき、天
上の理想を、この地上に實現する事によつて、いよいよ榮えてゆく
本當の高け原を、この地の中津國に實現してゆく國民である。地の
生命と共に榮えてゆく國民だ」と自ら呼んで居つたのである。斯の如
き信念をもち、かやうな自覺をもつてをりさへすればこそ、三千年

この方世界の、どこの國にも無い、一貫した國民精神を保持し、天子
と共に榮ゐるところの國の礎を築き上げたのである。

この國民は常に、億兆心を一つにして、大君に仕へるといふ事を
理想としてをる。一君萬民といふ言葉が、この信念から生れてをる。
これは支那の言葉をもつて、言ひ現されてをるが、

明治天皇にも、億兆心を一つにしてといふ優勅を我々に向つて下さ
れてをられる。嘗て、私が石川縣地方に遊説の時に、美川小學校の
講堂に「一君萬民」といふ額が掲げられてあるのを見たが、その額
を書いた人は、一君萬民の思想を事實に於て破つてをる人であるが
故に、私は若干遺憾に感じた譯である。

それは何故かといふと、この頃日本の政治家は、二大政黨の對立
をもつて、政治の理想的なものであるとし、議會政治の實を最もよ
く擧げる爲には、兩黨對立しなければならぬ。二大政黨の對立が
議會政治を運用する上に於て、最もよき道であるといつてゐる。現
に民政、政友、共にこのモットーを掲げて對立してをるが、美川小

學校の額を書いた人は懇意に願つてをる永井柳太郎君である。

四

永井君にも、私は常に、二大政黨の對立といふ事を、理想として掲げるといふ事は間違つてる。一君萬民億兆心を一にしなければならぬ。國が二つに分れるやうな、二大政黨の對立といふ事は、日本國本來の精神と違つてをると言つてゐるが、永井君は、それを改めやうともせずをる。その永井君も一君萬民がよいと考へてをるとみにて、學校の生徒に、左様に教へてをる。けれども、自分自身は之を事實に裏切つてゐる。

この事は、どちらが本當かといふ事を、我々は考へねばならぬ。昔からいふ一君萬民が本當の國柄であるか、それとも、國が二つに分かれる二大政黨の對立が本當であるか。

此頃の吾國の狀況をみると、全く二大政黨對立の結果、國が二分されつゝあつて、内閣が變る度に、地方長官は無論變り、了ひには官吏の頭株は全部、巡查にいたるまで、取替へられ、甚しきにいたりては、交番の位置まで政友會の時と、民政黨の時と違ひ、學校の

先生から小使までも替へられる、といふ状態にある。

一君萬民が理想であり、黨派などつくりえずに、陛下を御翼賛し奉るのが、議會政治の理想であつて、この理想を實現するまでの過程として、兩黨對立があるので、ゆくゆくは、絶滅するといふなら勘辨も出来る。

然るに二大政黨の對立が眞の理想だと、いふならば、これは許しがたいことである。かりに、二大政黨の對立の状態で、我國を處理してゆくのが、現在の政黨政治であるならば、日本の道から見ても、明かに過つてをる事を、私は此處に斷言する。國內政治が、二大政黨對立のため、如何に大きな罪惡不幸を招いてをるか、諸君が身に泌みて、既に經驗されてをられる事と思ふ。

これが國外に對する場合に於ては、その弊害は、一層激しいのである。何しろ、國が半分に分れてゐて、一方は、うかうかすると、敵にもなりかねないのであるから、外交がうまくゆく道理が斷じてない。私は決して、これを抽象的に言ふものではない、例を擧げろ

と仰言れば、いくらでも擧げる。由來、政友會は、強硬外交をもつて誇りとしてをるが、その外交の本質は、如何なるものであつたかといふと、之を具体的に例証して説明してみてもよろしい。

一昨々年の事であつたが、田中大將が、總理大臣をやつてをった時、東方會議を開いて、滿洲に對する積極政策を、斷行する意氣込みを示してをった。この聲明の手前、何等か積極的行動をとらねばならぬので、起つたのが例の吉會線問題である。積極政策をとるぞといつて、先づその政策の實を、一吉林と會寧をつなぐ、吉會線の開通といふ事によつて、現さうと努めて、盛んに、交渉を重ねてみたのであつたが、張作霖の爆死事件があり、その政權を繼いだ、張學良が、何んだ、彼んだといつて、日本の申出を受流してゐた。

私は多年滿洲に居り、往來してをった關係上、張學良と相當親しい間柄であつて、いつでも會つて、色々の話しをして居たものである。丁度この交渉の最中に奉天に行つて、張學良と會ひ、彼に日本の國家のよいこと、日本人の大和魂の如何に立派なものであるかな

どに就て話し、これに較べて支那の國民が如何に不幸であるか、支那に於て孔孟の精神がなくなつてから、如何に國家が苦勞してゐるか、等についても話し、支那人と日本人とは非常に異なるぞと、極めてむきだしに話したところ、張學良は甚だ感服したやうな、顔を上げて聞いてゐたが、私の話が終ると、「大川さんに見せるものがある」として、手紙をもつて來た。その手紙が、どんな手紙であつたかといふと、その頃學良の弟で、只今天津の市長をやつてゐる、張學銘といふのが、日本の士官學校に入つてをった。この弟から來た手紙でかういふ事が書いてあつた。

數日前に民政黨の某代議士（名前だけは公表することを、差し控へるが）が來て、『今の田中政友内閣をキツト倒し、吾黨内閣を造るか、その時は滿洲事件を君達の有利に解決してやる故、今の内閣が何と言つても、柳に風と受け流して居た方がよからう』と、又それから二三日経つて、他の同黨某代議士が來て、同じ事を見上に傳言してくれい、といふ事が書いてあつた。

これは一体、どういふのです。同じ日本人であつて、少なくとも日本にとつて有利な交渉であるにも拘はらず、それを政友會内閣がやつてゐるといふ理由のもとに、民政黨の代議士が、斯様な事をいふ事は明白に、賣國奴ではないか。……」斯の如き國家の大事をも、反對黨なるが故に反對するのでは、日本の外交が効果的に行はれ得る事は斷じてあり得ないではないか。

私は日本の代議士に、まさか賣國奴は居るまいと思つてゐたが、斯かる事實を見せ付けられて、呆然たらざるを得なかつた。その後實に驚くべき賣國的行爲の證據が、澤山に現れた。若し之等の事實を、この證據と共に諸君の前に公表することを許されるならば、諸君達は今日まで、彼等を應援した事などが、情けなくなつて、恐らく悶死するであらう。

日本の政黨者流は、張學良に滿洲利權で、色々な弱点を握られてゐる。従つて滿洲に於て、奉天官憲の行動に對し、自由な抗議を持ち込むことが出来ない義理合ひにあつた。鐵道問題にしる、排日法

律問題にしる、強くつき込むことが出来ぬ關係にあつた。一例を擧げると今度關東軍が、奉天を占領した際、同地に在る學良の東山省役所の金庫を叩き破つた中から、重要書類の若干に混つて、驚くべき澤山の賣國的證據が現れた。その一つを言へば日本の某代議士が學良に發行した五十萬圓の領收證があつた。それに關聯した事實、代議士、政治家、政黨の名も昭利維新が斷行された曉には、その書きつけと共に、諸君の目の前に現れるであらう。

我が國が何故に、日露戰役後、二十數ヶ年の歲月を経たる今日まで滿洲に於て發展し得なかつたかといふ事も、その時にハッキリと判るであらう。斯くの如く、學良から金を貰つて居るのでは、強硬な抗議が出来る譯はない。張作霖や張學良から、選舉費を貰つて代議士になつたのでは、日本の爲めに働かないのも不思議ではない。民間の人々が滿洲に於て何をしようと思つても出来なかつたのもこの故であつて、政黨政治家の或る者は、事實に於て滿洲の權益を、かねて學良に賣りつゝあつたのであるから、賣國奴と言つても、敢

て過言ではない。

滿洲の問題にしても、滿洲國家を我が國が承認したとしても、それで滿洲問題が全部解決したと、有頂天になつてはならない。從來より政黨政治家及びその財閥によつて、荒し盡された後仕末のみにしても、大變なものであつて、新しく一步から踏み出す覺悟で、より以上の苦闘をする決心でなければならぬ。吾々同胞が國をあげて血と肉をもつて、かち得たこの滿洲を、彼等政黨政治家及びその財閥の享樂の具に資せられて、なほ目覺めざる者ありとするならば、等しく國賊たるのそしりは免がれぬであらう。

斯くの如き、恐るべき、亡國的政黨者流に如何にして、吾等の生命線滿洲を委ね得べきか。此の儘に放任し彼等に委ねてゐては、到底その發展を期することは、不可能であることを斷言する。

滿洲を最も有効に、日本の生命線たらしむる爲めには、日本と滿洲との間に横はる、經濟的境界を除いて、滿洲を一單位として採る太きい經濟機構の中にとり入れた日本を造らねば不可能である。日

本側は、滿洲に對し、合理的投資を行はねば、却て日本に對して害をなすに至るであらう。

農業問題にしても、一番利益の擧がる米だとか、小麥にしても滿洲で作れば、内地の三分の一で出来る。滿鐵農務課の算定によると黒龍江省、奉天省、吉林省等では、米一升八錢で出来る。肥料は要らず土地は安いし、一升八錢の米を減茶苦茶に作られては、日本農村問題の解決とならず、日本農民の壓迫となるだけであるが故に、國家的統制のもとに、農業移民をやらねば、日本のためにならない。斯くの如く行き詰つた日本は、一日も早く行き詰つた資本主義經濟制度による所の、政黨政治を根本から改革し本當の、日本に建て替へなくてはならない。

私は丁度四ヶ月に亘つて、支那を旅行したのであるが、その年の二月上旬に、滿洲に於て、鐵道交渉が行はれてをつた。その時に、前外務大臣、その當時の支那公使の芳澤さんが、濟南事件の後始末を支那と交渉中であつたのである。

その芳澤公使は、前年二月月の暇をもつて、態々東京に來りて、自分の具体的な解決案を提げて、時の内閣と交渉した。内閣では、芳澤さんの試案を土台にして、四回迄も臨時閣議を開いて協議して之でよからうと議決したので、この案を提げて、芳澤公使は上海に歸つて、王正廷と交渉の結果、王正廷も、これに同意し、實は假調印まで濟せて了つた。

その條件は、極めて不徹底のものであつたが、内容が議會開會中であつたので、東京に於て洩れて、貴族院方面から「強硬外交を唱へてをりながら、今度の支那事件の後始末は、極めて軟弱である。實に日本は屈辱的な讓歩するではないか」と批難の聲が高まつた。さうすると、政府は、芳澤公使に電報して、その條約は暫く延期しろ」と命令した。實に四回迄も臨時閣議を開いて議決した條件通りにやつたが、議會に於て、反對の輿論が高まらんとするや、これを中止せよといふ様な馬鹿な事は、恐らく世界の外交史上に於て無からうと思ふ。

外務省の役人といふものは、大体溫和しい事を以て誇りとしてゐるが、この時ばかりは、支那の公使館の若い連中が憤慨して、芳澤さんに、「貴官はこんな馬鹿な事をされて黙つてゐるのですか、公使をやめて了ひなさい」と言つて喰つてかゝる。王正廷はまた、憤慨して「怪しからん、假調印まで濟せて破談にするとは、全世界に、日本の國際的不信を訴へる」と息巻いてゐた。芳澤さんが普通の人なら、やめてしまつたかも知れなかつたが、御承知の如く世界にも稀に見る辛捧強い人ですから、却々止めなかつた。腹は立てたてせうが、肝癪も起さず、王正廷をだましたかして、金でも握らしたのだらうが、有耶無耶に、その交渉を延ばしてしまつたか、打切つたかして了つた。

國內の輿論を考へてから外交をやる。貴族院の反對があれば、一旦假調印までした交渉も、打切つて了ふといふのは、外交でなくて内訌である。これは恰も、佛様のお尻に向つて、お經を上げてゐるやうなもので、何の効果もないのである。

政黨内閣が、如何に國家の不利益であるか、政黨内閣が如何に日本の海外に對する發展上に妨げとなるものであるか、といふ事はこれ等の事實を見ても、極めて明白である。畢竟これは、日本の國が、二つに分れてゐるからである。

積極外交、軟弱外交といふも、積極的に動かんとするか、冷淡にかまへてをるかの違いであつて、國家といふ、大きな眼から見れば同じく不利であるだけである。すべて外交といふものは、國民の力をもつてしなければ、うまくゆく道理のものではない。然るに、日本の今日の國際的立場を考へて見ると、實に非常な難局に立つてをるのであつて、同胞が一心同体となつてしても、これを、切り抜けるには容易ではない。それなのに、國が二つに分れてをるのであるから、段々と國際的に尾羽打ち枯すのみにして、少しも榮へて行かない。これ亦、何の不思議もないのである。

私は、滿洲事變を中心として、如何に日本を考へてゐるか、又各國が、如何なる態度をもつて、日本に向つて臨んでゐるか、いふ

ことを、若干の説明を試みようと思ふ。

滿洲事變の、發生の原因ともいふべきものは、日本が、滿洲に大々的發展を試みようとした事に對し、快く思はない支那が、偶々、我國を侮りすぎて、亂暴を働いたので、我國は、武力を以て、これを膺懲して、此處に、滿洲事變が生じたのである。

大体支那といふ國は、昔から、自分の力で、國際的問題を、片付けやうとはしないので、他の力を借りて、問題を、どうにかしやうとする、厄介な癖のある、國であつて、現に、台灣事件といふ、明治七年の事件があつたが、その時でさへも、日本の國が、あれ程まだ未發達な状態であり、支那が『清』といつて、全世界に、恐れられてゐる時代にあつてさへも、その問題を時のアメリカ大統領グラント將軍に、解決方を申込んでをる。それから又、日清戦争の時も、日本と講和談判をやつたのち、歐洲の強國であるロシア、フランス、ドイツといふ國に頼みて、日本から、遼東半島の取返しをやつた。即ち、三國干涉のもとを開いたのである。

今度滿洲の事變も、起ると直ぐに、ゼネバの國際聯盟へ、日本が攻撃して支那の領土を侵害したと訴へた。この時は、偶々、國際聯盟が總會を開いてをつたから、支那の提議を受け入れて、日本の、滿洲に對する態度を裁判したのである。この滿洲事變が起ると共に、裏面にあつて、最も日本の不利を圖つたものは、イギリスである事に、特に注意せねばならぬ。

支那の泣言を入れて、何故、イギリスが日本に、不利な行動を、とつたかといふと、これには、二つの理由がある。

その一つは、イギリスは、蔣介石といふ、支那の政權を、飽くまで、守りたて、置きたいといふ考へが、極めて強かつたのである。又今日も、此の考へが強い。

第二には、日本が、滿洲に於る物質を手に入れて、新工業國となつて、世界市場に、乗り出しはしないかといふ事を極端に嫌つた。

第三には滿洲事變が、世界戦争を導く、重大な機縁に、なりはしないかとかう考へたのである。

この三つの理由から、日本に對し、極めて不利な態度を、とつたのである。イギリスが、何故、蔣介石の政權を、立てなくてはならぬかと、考へたかといふに、これはイギリスが先年實に苦しい經驗を、嘗めてゐるからである。その苦い經驗といふのは、御承知の如く、後藤伯が、未だ生きてゐる時分に、日本とロシヤとの國交恢復をしようと思へ、ヨツフエといふロシヤの政治家を呼んで、色々相談を遂げた。その時、ヨツフエは、日本からの歸り途、支那に渡つて、支那革命の先覺、孫逸仙と會合したのである。

ヨツフエは孫逸仙に向つて、かういふことを言つてゐる。『あなたはこれまで幾度か、支那軍閥どもの御輿にばかりなつて來た。大体支那の軍閥は、自分等の都合のよい時は、貴官を擔ぎ上げるが、用事のなくなる時、何故か、何時でも放つたらかす。貴官は、ある期間利用されると、放り出されては、その志を遂げてゐない。今迄の通りの道を踏んでゐたならば、何度でも、同様の事を繰り返して、結局志を遂げる事が出來ない。それより、遣り方のかへて、支那の軍

閥を相手とせず、自分の力で軍隊を造りあげて遣る事である。もしも貴官に其の氣があれば、ロシヤは、人と金とを貸しませう』と。孫逸仙は、直に、これに應じた。そして、ソビエート、ロシヤから金も借り、政治、軍事方面の指導者を借りて革命の戦術を改め、革命に必要な軍隊を養つたのである。政治方面の指導者として、ボロウジン、軍事指導者として、ガロン將軍を得、ロシヤの金と人を得た。孫逸仙は、直に楊子江沿岸に出て、上海の方へと軍を向はせたから、軍は直に非常な勢となつたのである。

この時、支那の各地を動かしたのは、ロシヤから借りた金と、人と、即ち共産主義の實行であつた。故に長江沿岸は、共産主義が漲つたのである。この共産主義は、支那を、帝國主義の羈絆から、脱出せしめようといふ、政策をとつて、ロシヤは、長江沿岸に於て勢力を揮ひ、帝國主義諸國を、驅逐する戦術を、とつたのである。

この長江沿岸に、勢力をふるつてゐるのは、日本とイギリスである。此兩國を同時に敵としては、甚だ不利だといふので、ここに排

撃の全力を、先づ、イギリスに注いだのである。

この猛烈な、共産黨の反英運動に、イギリスは散々な目にあつて遂に一萬八千からの兵を出して居留民の保護等を、しなければならぬといふ程になつて了つたのである。

實は此の時の日本の外交は、極めて拙かつた。當時日本に對してイギリスは共同出兵を、申込んで來たが、その頃は、日本に對して支那は極めて機嫌を取つてゐたので、多年に亘る侮日を、すつかり改めた様に見せかけて、イギリス帝國主義打倒一本主義で來てゐるから、日本は、イギリスの提言を撥付けて、支那に好意をよせたなら、それに恩を感じて排日を止めて了ふだらうなどと、甘い至つて認識不足な馬鹿な考へから、イギリスの提言を退けたので、支那は策功を奏したりと、排英に全力を注ぎ、いよいよイギリスの勢力を長江から追つばらつてしまふと、今度は、先の態度はどこへやら、全力を擧げて排日に方向を變へてきたのである。

兎に角、イギリスは、ひどい目に、あつたのである。かくて一時

は長江沿岸に共産主義の砦を築いて、同時にその手をヘルシヤならびに、印度に延ばした。このため英國々民に、非常に経済的關係が深い、ヘルシヤに於て排英運動が深くなつた。一方、印度に於ても更に排英運動が盛んになりだした。大体印度の反英運動は、今世紀の始め以來約三十年の歴史をもつてゐるが、支那の共産黨が楊子江沿岸に入り込んだ時程、極端な、反英運動を起したことはなかつたのである。のみならずこの共産黨の手は、佛領印度支那にも及んだため、安南に於ても、極めて大規模な革命運動が起つたのである。安南の獨立運動、これも永い歴史をもつてゐるが、フランスの統治を脅やかす程大きなものになつたのは、やはり、この時である。兎に角英國も、佛國も、支那の楊子江沿岸に、共産黨が勢力を得たために、散々な目にあつたのである。

この時、支那は、共産黨と手を切つて、ボロデーーンや、ギヤロンを支那から追拂はんとした人が今の國民政府の蔣介石である。無論これは蔣介石一人の力ではなく、彼を背後から助け、彼をしてこたへて行かうとしても、ロシヤでは、これを受けつけないのである。

支那には、蔣介石の外に、閻錫山と、馮玉祥の二人が、多數の兵をもつて威勢を揮つてゐるのである。この中の馮玉祥は、甘肅の方面にあつて、世間で傳へられてゐるよりは、もつと大きい、軍隊をもつてゐるのであるが、大体は甘肅といふ土地は、至つて瘦せた土地であるから、大軍を養ふ力をもつてゐない。それに、あれだけの大軍を、養つてゐる所から見ても、何れかの國の後援があるに違ひないのである。これは、いふまでもなく、ロシヤである。ロシヤは、暗々に、馮と手を握つてをると考へねばならぬ。

この外に、廣東政府がある、これは國民黨の極左派が、勢力を揮

つてゐるのであるから、この一派は、自分達の都合によつては、ロシヤとも、手を握る可能性が十分にある。こんな状態であるから、イギリスが、最も頼みにしてゐるのは、南京政府の蔣介石である。満洲事變が起ると共に、英國のランブソン公使が、蔣介石を助けるために飛び廻つて彼を斡旋してゐるといふ事も、英國の考へでは蔣介石を満洲の張學良と手を握らして、支那を共產政治から、防がうといふ考へである。

日本の勢力が、満洲で揮はれる事は、蔣介石、張學良の勢力を、衰へさすといふ事になり、日本の勢力と、蔣介石の勢力は、満洲に於ては、並び立たないために、英國は、日本を押へようとしたのである。これが、今日の事變に於ける、英國が、日本に不利を圖る、最大の原因である。

もう一つの理由は、イギリスは日本といふ國が、その經濟的な關係から、満洲に發展してはならない。もしも、満洲に於て、日本が發展するならば、イギリスの東洋に於ける經濟的地位は、きつと脅

かされるに相違ないといふ事を、早くも見てとつてをるのである。

大体、イギリスといふ國は、物事に對して、非常に早く、先手を打つ國であつて、世界戦争の以前に於ても、ドイツが、非常な勢力をもつて發展し、世界一の國として、勃興し始めたのに、これを押へつけやうとして、あの世界大戦争が、起つたのである。その結果は最初傍觀者であつた、アメリカが新興工業國として現れたが、いかなイギリスも、このアメリカを、押へ付けるだけの勇氣はないので、事實に於てイギリスには、アメリカに喧嘩を吹きかける程の、實力を有してゐないのである。

このアメリカに次いで、世界に最も、將來恐るべき敵は、我が日本と、見て取つたのであるから、もしも、日本が満洲に於て、政治的に、經濟的權力を確立して、あの豊富なる資源を、利用して來るならば、少なくとも、東洋に於ける、イギリスの市場は、完全に、日本のために、失はれて了ふだらう。少なくとも、日本が、黄色人種として、自分の勢力範圍内に收めて、その國力を發揮することは、

ヘルシヤ、印度を始め、自己の領土として、統治權を握つてゐるところの、有色民族に、大なる獨立の希望を與へしめ、英國領土内に、不安の種を蒔く、といふ事を恐れたが故に、若しや、延いて、これが第二の世界戦争を巻き起しはせぬかと、心配したために、日本に對して、極く不利な態度をとつたのである。

この一事を見ても、イギリスが日本に對し、如何に、利害が相容れないかといふこと、この日本の勃興を、如何に欲しないか、といふ事が解るのである。

イギリスは、機會があれば、日本を叩きつけやうとしてゐる事は極めて明瞭である、このイギリスの、日本に對する敵意といふものは、今度の國際聯盟で現れてゐるのみならず、莫大な金を投じて、新嘉坡に、軍港を築き上げた事によつても明白である。イギリスは我日本を、あらゆる機會に於て抑へ付けやうとする、確然たる意圖を有する事を知らねばならぬ。

フランスも、色々の理由から、國際聯盟に於て、イギリスと歩調を同一にして、日本を抑へつけやうとしたのである。この最も大なる理由は、イギリスとは違ひ、フランスは、國際聯盟をもつて、ドイツを抑へつける、最も大事な機關としてゐるのであつて、現在フランスの最も恐れるのは、ドイツであるので、日本を國際聯盟で抑へ付けようとしてゐる。國際聯盟といふものが權力をもてば、もつ程、フランスにとつて、對獨乙の力が有利になるために、若し日本の如き、強國が國際聯盟で壓服されたといふ事になれば、國際聯盟を權威あらしめる爲めに、イギリスと同一歩調を、とつてゐるのである。その他に、イギリスと同じく、赤露のギャロン等が楊子江の沿岸ではびこつた時代に、安南で非常な不安な經驗をなめて居る。黄色人種である日本が、強國になれば、安南も、獨立の氣運を萌す事を憂へて、イギリス、フランスが、日本の勃興を喜ばないのである。

アメリカが、日本の勃興を喜ばないのは、これ亦、私がこゝていふ要もない程明白である。アメリカといふ國は、日露戦争までは、日

本と最も親交のあつた國であつた。日露戦争の終に當つて、アメリカの大統領ルーズベルトが、日露兩國の間を斡旋して、先づ出来るだけの好意を、表してをつたのであるが、日露戦争が終つてからといふものは、一番仲のよかつた國が、最も日本に對して、反感をもつ國柄となつて來た。それは、どういふ心理からか、私にも不可解であるが、桑港から加州に於ける、移民の排斥から端を發して、日本の對外政策には、悉く反對の態度をもつて、今日に及んでをる。その最もよい例は、日露戦争のポーツマス條約が、まだ調印されぬ前、アメリカは、ハリマンといふ大企業家を日本に寄越し、日本の桂内閣に、滿鐵の利權を半分寄越せ、といふ談判させたのである。この時の桂内閣は、如何なる譯であつたか、ハリマンに對して、其の要求に内諾を與へた。ハリマンはこの假契約書をもつて、政府が調印した、その日に、アメリカへ向つた。之と行違ひに、歸つて來たのは、小村壽太郎であつた。小村さんの事を考へると、誠に涙ぐましいものがある。小村さんの心中には「外交の本當の使命を果す」

といふ外に、何もなかつたのだと思はれる。

小村侯は、ポーツマスの、外交を終へて、カナダから船に乗る時は、病氣が重くなつて、ずっと船中は寢通しであつたが、横濱につく三日前から、デツキの上を杖をつきながら歩き始めた。供の人が、重病だからと言葉をつくして止めたが、少しも耳に入れず、「俺は日本に上陸すると、どんなことが起つてをらんとも限らぬ、その時に、肝腎の自分が、足腰の立たぬでは、何も出來ぬから、自分は十分に歩けるやうになるまで、歩く稽古をするのだ」といつて、その病弱の體をもつて、杖をつきながら、デツキの上を歩いて居つたのである。侯が日本に上陸してみると、果して大事が起つてゐた。

横濱埠頭に迎へた、山座圓次郎から『滿鐵の權利を、米國に半分やる契約をして了つたので、ハリマンは國へ歸つた』といふ事を聞いて、非常に驚き且怒り、直に東京へ駈けつけ、要路の人々を説きこの調印を破棄させた。小村侯は「日本があれだけの犠牲を拂つて得た、僅かの賠償の中、滿鐵の權利といふのは、殆どその全部では

ないか。國民はこの講和談判に不満で、あの通り暴動まで起したてはないか。その漸く得たところの半分まで、アメリカに渡はれるなら、國民の憤激をどうする。滿洲の野に屍を晒した忠勇の士に對して何と申譯するか」と旺んに叫んで、それを翻へさせたので、丁度ハリマンが桑港に上陸してみると、日本の總領事が「滿鐵の契約は取消した」と言つたといふ事である。

小村侯が病弱の身を押しして、それ程、努力して呉れたために、日本は滿鐵を完ふする事が出来たのである。その後アメリカの日本に對する態度といふものは、どんな政策に對しても干涉するといふ、近世の外交史上に於て類のない亂暴狼藉を極めたものである。言はば横車の押し通しである。

日本は幸か、不幸か、實に世界の三大脱線國間に挟まつて居る。西には支那及びロシアといふ、實に困り抜く脱線國と隣りし、海の彼方には、アメリカといふ大脱線國と隣り合つてゐる。此の三國は世界に於て、最大の國土をもつて居る國であり、非常に大きい領土

をもつてをる。この大脱線國を三方に控へてゐるのであるから、日本の外交といふものは、極めて困難である。

かゝる時に、國が半分に割れてをつては、太刀打が六ヶ敷しい。國の廣さからいふならば、小さい日本國をもつてして、この國際難局を見事に切り開いてゆくには、どうしても國民全体が、一つにならねばならないのに、二つになつてゐては、どうしても難局の打開は出来ない。

私は、今日の如き、二大政黨の對立が、理想だなど、言ふ、馬鹿な考へは、速かに止めてもらい度いと思つてゐる。否、止めてもらはねばならぬ。

斯様な愚なる理想をもつてして、日本を今日の難局に、導いて來たところの無智、低級な政黨は、叩き潰さねば、國家の將來危しと固く信ずるものである。この二大政黨の對立があるため、どれほど國民が迷惑を蒙つて苦勞してゐるかといふ事を、私は澤山の實例によつて、信じてゐる。

大分縣に行く、小さな町であるに拘はらず停車場が二つある。一つは政友會、一つは民政黨の停車場である。交番の位置が、政黨内閣の變る度毎に、同じ村でも變る。政友會の時には、あつちにあつたのを、民政黨の時にはこつちへ持つて來る。村の人は、その事實を知つて居るから、政友會の内閣になると、命令を待たずに、自分等で擔いでもつてゆく。事情を知らない縣の新警察部長が怒り出すと、「あの部長は生(ナマ)だ、今に解るだらう」と平氣で居ると、その通り解る。斯様な例は全國に多々ある。

私は山形の庄内のものであるが、酒田の築港の問題が非常にやかましくなつてゐて、既に内務省の築港と確定してゐたのが、今度の知事になると、如何なる動機か知らぬが、築港は止めたと言ひ出し、地許民は、實に迷惑至極であるのみならず、政黨の變る度に、縣知事以下が全部變つて了ふ。

知事なんて、俗に「浮草稼業」と言はれてゐて、縣民の生活などを考へるひまもなく、平均十ヶ月乃至八ヶ月位でドンドン變る命であるから、更迭の時の用意か、所屬政黨の、御氣嫌を取つてゐると、全く仕事をするひまもない譯である。

斯の如き事が、政治の實際であるなら、日本の國民生活が正しくなりゆかないのは、當然であり、之に向つて望を托する事は馬鹿の骨頂である。

年々歳々國民の生活は、逼迫するばかりである。丁度日本の政治は、國民に對して、忍耐試験を行ひつゝあるのだ、としか考へられぬ。國民はまた、如何なる氣であるのか、實に、よく辛棒する。丁度、今は忍耐試験の最中である。御承知の如く、日本人は非常に、忍耐強い國民であつて、三百年間も素町人、土百姓で、斬り捨て御免を、辛棒して居つた國民であるから、今度も或は辛棒するつもりかも知れぬが、あの頃と、今日の内外の事情が大變違つて居るからもう、一日も早く自覺めねば、一思ひに斬り捨てらるゝ、昔と異なり、なぶり殺しにされて、苦しみ抜かねばならぬ。

今度國民の困窮は、益々逼迫してゆく事は、數字が之を示して居

り、もう何とも出来ない状態である。選挙には、景氣は好きか、不景氣が好きか、など、國民を馬鹿にした事を言つて居るが、日本の金は外國へ流れてゆき、日本の金庫は空になつてゐるぢやないか。この恐るべき傾向は、國家の政治機構、現在の政治經濟機構を根本から改めなければ、とても、選挙位で治る道理のものではない。國民の思想が、險悪になるのも當り前であつて、ならなかつたら不思議と言はねばならぬ。井上さん團さんなどが、暗殺されてから新聞や雑誌などで、思想の險悪を説き出したけれど、思想は、この悲しい出來事のない前から、悪くなつてゐたのである。この思想險悪と言ふ病氣は、既に昔から罹つていたので、熱を出したり、嘔吐いたりするのは、病氣にならんとするのではなくて、病氣があるからだ。その病氣が表へ現はれた時に、悲しい出來事となつたもので、今後その病源をなほさざる限り、同様の不幸が起らないとは、誰が斷言出來やうか。病源を治さずして、食物を喰べさせようとするのは、病氣をなほすのではなくて殺すのである、と同じ道理である。

斯様な出來事が起るのをもつて、警視廳の取締りが悪いからだなどとせめて見たり、責任者が辞表を提出する事によつて、精算せんとするやうな、馬鹿な事は、全く以ての外と言はねばならぬ。幾ら憲兵隊を鞭撻しようが、警察を怒らうが、法律を嚴重にしようが病氣の原因に向つて手術をしない限りは、何の効果はないのである。我々は、本當に此の事を考へて見ねばならない。若しこのまゝにして、日本が行くならば、遂に日本は立ち腐るより外にないといふ事は、眞面目に考へる人は恐らく同感だらうと思ふ。今日の日本の國にとつて、禍の基となつてゐるのは、いふまでもなく、政黨と財閥の結托である。

吾が神武會などに對しても、關西方面の資産家が、大變に好意をもつてゐる、二百萬、三百萬の金をもつてゐるが、自分の力で、腕で、産をなした人、一生懸命に働いて築き上げた様な、眞面目な人達は不思議な位に好意を寄せて呉れてゐる。政黨の走狗になつたり政黨と結托して不純な方法によつて貯へた金持や、政黨と結托して

國家も國民も食ひつぶさうとする人達に限つて、政黨に馬鹿に力を入れて居る。であるから私達などが、國家國民の將來を案じて斯く全國に遊説して、各地で種々の人々にも、金持にも會ふが二三會談や交すと、すつかり其の人成りの大體が解る。

關西地方の商人は、東京地方の商人と異なつて、汗と油で築き上げた人が多い。そして二三百萬の資産が出来る、やれ、一番信じてゐる息子は共產黨になるは、事業も一定限度に達すると、三井、三菱、或は住友などの爲めに必ず壓倒される。そして總選舉になると、政黨方面から、金をせがまれる。これを拒むと、商賣は滅茶苦茶にされる、といふ現状であるから、吾等の如き、憂國の眞面目なる指導團體に對しては、心から共鳴もし、援助もして呉れるといふ現状である。

斯かる意味からしても、既成政黨に對する反感は非常なもので、そして、全國大多數の國民は、吾等と共に、日本を造りかへてやうといふ意味をもつてゐる。斯かる實狀を見る上からは、私はもう

國民が立ち上つて、新しい道を切り拓くべき時が十分に熟してゐると信じてゐる。否、早く立たぬと、立ちおくれとなる感がある。

既成政黨及財閥は、今日非常な、金城鐵壁を廻らしてゐるやうに見えるが、その内實は、弱り切つて居る。論より証據に、政友會は三百三名といふ、國會初まつて以來の、絶大多數を有して居るけれども、それが如何なる壓力を、國民に向つてもつてゐるか。あれほど、その頭數をもつてゐながら、何の力もない。只彼等は大きくなつたが、中から割れて、二つにも、三つにも、なりはしないかといふ憂へだけである。彼等は、日本の國民生活を、如何にして改善してゆくかといふ事を考へる暇がなくて、鈴木と久原が喧嘩したとか、床次がどうしたとか、碌でもない事で喧嘩してゐるだけである。彼等は實際の所、國民や國家の事を考へてゐない。考へてゐても、それを實行するの意志もなければ、力もないのである。今日に至るまで、國民生活の根本對策など、一つも考へてゐない。

或は國策審議會といふやうなものも、こしらへて居るが、そんな

ものは、あつてもなくてもよいので、只大臣になれなかつた不平家や、貴族院の機嫌とりに、やつてゐるのだから、その日その日を、誤魔化して行く事ばかり考へてゐるといふ事は、論より証據、事實が明白に物語つてゐるではないか。

日本の議會は、議員の三分の二以上を占めれば、憲法の改正も出来るのだから、政友會が日頃唱へて居る様に「政友會だけが日本の國を愛する」などと宣傳してゐるのが事實であるならば、彼等の大好きな、買収でも、何でもやつて、もう五六名、民政黨から引張つて来て、日本の國を眞に生かすやうな手段をとればよいのである。さうなれば、我々愛國者は一緒に日本の改造をやる。しかし、彼等には、そんな國難打開だの、時局匡救だの、日本の國の將來だのといふ事は少しも考へて居ない。彼等はなるべく、所屬政黨や、其の財閥から非難される事を避けて、一日でも永く、今日の權力を保たうといふ事位が、關の山である、彼等は数字は多いが、本當の力もつてゐない。

財閥は、どうかといふに、これも同様である。團さんが刺客にあつてからは、出入口まで、嘗て自動車と呼ぶ場合にも、「何々さんの車を」といふたのを此の頃は、番號を呼ぶやうになつてゐる。表面は非常に強いやうであるが、内實は弱い。

我々自身の經驗にしても、總選舉中に、全國に亘つて、約一ヶ月間、六十ヶ所の選舉覺醒運動に合せて、重大時に於ける國民の奮起の演說會を神武會の名に於て開き、政黨の打倒と、財閥の討伐を、國民に向つて呼びかけたが、憲兵隊からも、警察からも、中央に之が報告が集まつて居る。どんな事をいふて來たかと、見せて貰つた處が、實に其の報告が誇大であつて、私の所へ各地から來た報告も實際よりも若干景氣をつけて來たんだらうが、それよりも警保局に集つてゐる報告は、ずつと大きい。それは何故かといふと、恐らくさう大きく響いたのであらう。これは新興勢力に對する恐怖心を、明瞭に反映した証據である。彼等が若し、非常に強い自信をもつてゐるならば、この新しく興る勢力に對して、こんなに恐れる必要は

ない。この大川が演説をするといふと、斯様に多数の警官が臨監さ

る、が、これ亦この既成勢力の恐怖心の一つの現はれである。この既成勢力は、段々弱りつゝある。否今や、斷末魔のものがきにある。であるから、外見非常に強さうな、虚勢を張つてゐるが、一歩一歩、死地に近づきつゝあるのである。彼等が、自ら亡びることは、我々にとりて又國家に取りて喜ぶべきではあるが、國家國民を道づれにせんとしつゝあるから、放任して置くことが出來ず、國民の覺醒と奮起を求めて、之が防備を叫んでゐるのである。

眞に國民が、覺悟をきめてか、れば、こんなものを倒すことは朝飯前である。しかし彼等には、表面に立つて、堂々と戦ふの力を、すでに失つてゐるから、泣いたり、呻吟いたり、かみ付いたり、喰いついたりして、無我夢中に反抗するであらうが、こんな事に、頓着してゐては、遂には、彼等と共に死地に陥らねばならぬ。

既成政黨や、財閥に對する糾弾を、若し無理に止めるならば、それは大變な事になるだらう。私は決して不法な方法を以て、糾弾し

ようとは考へてゐない。國民の公憤に訴へて、國民の力を以て糾弾し、眞の日本を造りたいと思つてゐる。

吾が神武會は、決して會員を澤山つくり、その會員で既成勢力を倒し、現在の政友若しくは民政黨に取つて、代らうなどといふ馬鹿な考へは、毛頭もつてゐない。今日の如き時代に、新に一黨一派を建て、居る可き時ではない。或は社會民衆黨とか、國民社會黨だといふものを建てて、自分だけの力で、この既成政黨を倒し、自分等だけが、日本の後始末をしようと思つても、決してそれは、成功するものではない。我々は、只日本の行詰つた道を、切り開く、先導の役目を、つとめてゐるのである。既成政黨と、その縁族の本據をついて、之を倒した後は、國民全体の力で、この日本を建て直さねばならぬ。そして、本當の國民的改造運動の出來るやうな國柄にしたい。

かういふと、そんなら、お前は、この國家を、どんな風に改めやうといふのだ、どういふ國家がお前の理想か、お前はどういふ政策

をもつて居るか、といふ質問が必ず出るだらう。私はそれを貴方方の前に、説明する事は極めて容易であるが、左様な、政策政綱といふものは、極めて抽象的な議論であつて、實際の政治家にも、眞の憂國の國民にも、生るべき日本が、如何なる政策を實行しなければならぬかといふ事は、大抵解つてゐるのである。

ヨーロッパ戦争以後、十何年間の世界政治の變遷は、この我々に最もよき經驗を與へて居るのである。世界大戦を轉機として、政治上に、大變革が各國に及びつゝあるが、その最も大きなものは、ロシアである。

ロシアは戦時共產主義といふ、極端なる、左の政治形態から、新經濟政策、新々經濟政策といふ風に轉化して、只今のスターリングがやつてゐるところの政治は、レーニンの、社會主義から見ると、非常な隔たりがあつて、右に歸つて來てゐるのである。ロシアが、はじめに社會主義政治を實行した頃から見ると、殆んど別個の政治形態と言つていゝ程、右に傾いて居るのである。

イギリスや、ドイツは、白い旗をたて、共產黨を、極端に強壓してゐるにもかゝらず、その實際に行ひつゝある、政策といふものは、世界戦直後に較べると、今日は、非常な左になつてゐる。一例をあげて言へば――

ドイツの最近の、相續税は、實に六割からとつてゐる。親爺の殘した財産の六割を、國家が沒收してゐる。――それ程ドイツのやる事は左に來てゐる。これは將來三十年、若しくは五十年経てば、左と右の兩方から歩み寄つて、世界の國々は、同じ經濟機構になる事は解りきつてゐる。必ず將來斯くなる事を斷言して置く。

其名前は、何主義でも構はぬが、實際は、經濟機構は各國とも一つになる傾向となつて居る。これは丁度、フランス革命以後の、政治傾向と同じである。十八世紀の末に、フランスに革命が行はれ、そして、君主國が、共和國になつたのである。この時、共和制に賛成した國もあり、又反對した國もあつたに拘はらず、その後、五十年ならずして、世界の政治機構は、みんな一つになつて了つた。或

は革命を行つて、大統領を戴いたのもあり、國王を戴いたまゝ、政治機構だけは、自然の必要に迫られて、三十年、五十年の中に、同じ機構になつて了つたのである。國体は全然違つた君主國でも、共和國でも、やる政治はみんな同じやうになつて了つた。

それと同じやうに、現在の政治も將來は、同じになるのである。今日一國を、改造しようとするならば、その、なさねばならぬところの方針は、ロシアの右、ドイツの左、この間を目標にやるべきである。この方針をもつて、その國々の事情に應じて、最も適切に、最も早く、改造をやる國が、將來世界の先進國となる譯である。

我が日本が、早くこの改造を斷行しなければ、世界の新樂土となる事は、出来ない譯である。若し三十年か、五十年経つて、世界各國が、やつて了つてから、ヤツサラ、モツサラと、やつたのでは、立ちどころが、なくなるから、今の間にこの改造を、我が日本の精神によつて、斷行する事が、我々の任務であると、信ずるものである。之は何主義でもない、共產主義でもない、資本主義でもない。

何かやらねばならぬ事は判つてゐる。國民のために、これだけはやらねばならぬが、その方法は、どうかといふと、國家改造案學といふ教科書めいたものを、前において、國家を造り變へようといふのは、極めて素人的な書生流な考へである。

國家は、壁と違ふから、その表へ、繪を描くやうな譯にはいかぬのである。我々の改造の要領は、最も國民生活にとつて、最も痛切な利害關係ある一点を、つかまへて、この一点を先づ根本的に改革する事である。さすれば、他の方面は、自から根本的改革をしなくては、ならなくなつてくる。

例へば、國民の生活窮状は、多々あるが、そのどれでもよいから一つを斷行すればよい。農村のモラトリアム案でも、地租の全免でも、その一つである。今日我國の農村は、約六十數億の借金に苦しんでゐる。その借金の中の五十億は、拂はうと思つても、拂へぬものである。農村が六十億の借金を背負うてゐるといふ事は、その心持に對し、非常な壓迫を加へてゐるから、農民生活のあらゆる方面

に、重苦しく負ひかぶさつてゐる。若し、今に於て果斷な者が現はれて、農村のモラトリアムでも斷行するならば、我が國は、農村のみならず、この一事の斷行によつて、日本の根本的な、改革は立ちどころに出来る。

従つて、銀行は非常な影響を受け、これがために、我國の金融制度は、嫌が應でも、根本的な改革をされなければ、立つてゆかなくなる。そんな時に自分一人で、之を斷行しようと思へてゐてはならぬ。銀行の事に詳しい人は金融制度が、根本的に改革せらるれば、その方に經驗のある人がやらなければならぬ。

唯改革だ、改革だと、騒ぎ廻る書生流者の集りに、この難事、この大事は出来るものではない。

要するに、改革の根本原理を、ハツキリと、認識してやればよい譯である。何もかも一人で、やらなければならぬ事はなく、國民全体が各々その長所に従ひて、新日本の建設に努力するといふ事が、我々の唱へる、日本改造方法である。

吾々は、先にも述べた通り、新黨派を造つて、天下を取らんとするものではない。我々は、吾々の精神、勢力が國民に徹底すれば、政府をして、或は金貨の改鑄でもよい、借金棒引、又は半減論でも農村のモラトリアム、地租の全免でもよい、最も重要な、その一つの政策斷行を迫りたい。この一つの斷行によつて、日本改造の端緒を開きたいといふのが、我々の望みであり、また、私が全國を説き廻つて歩くのも、この志を以て、日本の改造に向つて進む、眞の日本精神に生きる、眞の愛國の士、眞の日本人たる同志を求めんがためである。

兎に角、日本改造の端緒を作りさへすれば、後はみんな國民は各々其の長所に應じて、本當の舉國一致の行動を以つて起ち、内は日本の國民的窮迫を救ひ、外は天業を世界に恢弘せなければならぬ。

此の重大時に於て、吾々が起つところのものは、日本建國の精神でなくてならぬ。今日、日本が、あらゆる方面に行き詰つてゐるのは、その行く可き方向を間違ひて、目指すところを誤つたからであ

つて、正しい方法と方向に向つて進むなら、何時迄も、何處に行くとも、行き詰る道理はなく、進めば進む程道が拓けるものである。道と方法を間違へて、行詰つたのであるから速かに、出直す事を考へなくてはならぬ。されば、どこまで出直すべきかといふに、神武天皇の御創業の御意志にまで、出直さなくてはならぬ。

三千年の國家を築いた、その精神に立ち歸つて、新なる日本の歩みを踏み出す。歩みを、踏み出すために、我々は先づ既成の悪勢力を倒さうといふのである。政友でも、民政でも、我々は何れを問はない。眞に國家國民を礎とした神武建國の精神に立ち歸り、悪を知り、非をさとり、決然として、眞の日本人に生き變つて起つならば我々は、それと共に進む覺悟をもつてゐる。

自分等の手でやらう、といふ考へは決してもつてはならぬ。自分だけでやらうと言ふ考へで進めば、自者といふ考へが出て、既成政黨の様に、動の基礎の下に立たないで、對象の力、生命の建前に立つやうになつて、改造などは決して出来るものでない。誰でも良い

から、やらう、やらせよう、との考へで進まねばならぬ。この考へで、相結ぶならば、今に改造は必ず出来る。

この「ムスビ」といふ事は、特殊な大和言葉であつて、ものが一つになる言葉であると同時に、ものを作り出す、ものを産む、といふ意味をもつてゐる。高産靈タカムスビ、神産靈カミムスビの神と、いふものが一緒になるといふ意味と、ものを生み出すといふ意味をもつてゐる。我々もこの結ぶ事によつて、新しい力、生命が生れる。三と五が、加はると八になるといふが、單に三と五が、加はつて八となると考へてはならない。八といふもの、中に、三と五が結ばれてゐるといふ事を考へると、そこに新に偉大な力、生命を見出すことが出来る。三と五が本當に結べば、百の力、生命即ち千の力、生命である。

この意味に於て、私は、皆様と結んで、有史以來の國難に直面して、危機に瀕しつ、ある此の皇國を匡救し、一切の邪惡を一掃して新しい日本の建設に向つて、捨身精進、この大業を成就せんために御賛助と、御提携を願ふものである。

趣旨

内は農民の窮乏、労働者の貧困、失業群の増大に、到るところ唯是れ生活の惨害に呻く聲のみ高い。外は國際的地歩日に危くして、四面に楚歌を聞く。君國內外の形勢、實に累卵の危きよりも危きに拘らず、國務の重責に任ずる政黨政治家は、黨利黨界を事としてまた愛國の誠なく金融産業を支配する政商財閥は、私利私慾に専にして毫も愛民の情がない。思想は動亂を極めて居る。階級闘争は深刻を加へつゝある。日輪の轉するところ、我等は天下の事たゞ日々に非なるを見る。

而も困厄の時は即ち奮起の時、死の時は即ち活の時である。水流宛まらんとしてまた通じ、一路絶ゆることなくして大道開弘す。日本の今は其時でなければならぬ。愛國の士が奮起すべき秋は來た。茲に四海同心の友と共に濃かに赤誠を修め、凜烈の氣を鮮かにして、神武建國の精神を體し、以て君國の命脈を此の非常時に負擔すべく、興然として起つて神武會を組織したのは、志すところ他なし、ひとへに神武精神の發揚によつ

て神聖なる國體を無窮に護持し、國難を抜本的に打開して國家隆興の根基を確立せんが爲である。四方の同志希くは來りて我等と共に君國の榮辱を双肩に荷はん事を。

主義

一、神武建國の精神を宣揚し、誠忠を誓ひて神聖なる國體を無窮に護持し、天業を四海に恢弘するの覺悟を堅確にして先づ有色民族の解放及び指導に任じ、更に世界の道義の統一に向つて勇往邁進す。

綱領

一、日本建國の精神、日本國家の本質、及び國家的理想を闡明し、本末主客顛倒せる形式的教育の弊風を改革し、眞個の日本國々民を育成すべき、皇國的教育組織の實現を期す。
一、天皇親政の本義に則り、黨利を主として國策を従とする政黨政治の陋習を打破し、億兆心を一にして天業を四海に恢弘すべき。
一、皇國的政治組織の實現を期す。
一、一君萬民の國風に基き、私利を主として民福を従とする資本主義

經濟の搾取を排除し、全民の生活を安定せしむべき
皇國の經濟組織の實現を期す。

規約

- 第一條 本會ハ神武會ト稱シ盡忠報國ノ日本國民ヲ以テ組織ス
 - 第二條 本會ハ神武建國ノ精神ニ基キ皇國的理想ヲ實現スルヲ以テ目的トス
 - 第三條 本會ハ會頭ヲ推戴シ本會一切ノ行動ヲ統轄セシム
 - 第四條 本會ハ會頭任命ノ理事數名ヲ置キ會務ヲ處理セシム
 - 第五條 本會ハ各地ニ支部ヲ設ケ數個ノ支部ヲ聯結シ支部聯合會ヲ置ク
 - 第六條 支部及ヒ支部聯合會役員ハ推薦ニ據リ會頭之ヲ任命ス
 - 第七條 本會々費ハ月額金拾錢トス
 - 第八條 本會々員ハ機關紙及ヒ本會出版物ノ配布ヲ受ク
 - 第九條 本會々員ハ理想日本國民トシテ行動スル義務ヲ有ス
 - 第十條 本會々員ニシテ日本國民タル體面ヲ汚損スルモノハ除名ス
- 神武會會頭

昭和八年一月十三日納本 (非賣品)
昭和八年一月十八日發行

名古屋市中區老松町四丁目三五番地
發行兼編輯 松 田 操
印刷所 野 崎 縱 横 社
名古屋市中區新榮町四丁目六番地

發行所 神武會名古屋支部
名古屋市中區老松町六丁目十七

終

